

2025 年 3 月の総評に代えて 高橋修宏

瘡蓋をやぶリエーデルワイスの火

さいう（石川県）

何より、「瘡蓋」と「エーデルワイス」の距離感に驚く。「エーデルワイス」は、アルプス地帯に白い花をつけるミヤマウスユキソウの独語名。その「火」が、傷みなのか、救いなのか明かされぬまま、読者に手渡される。

春疾風口語の時代はまださむい

田崎森太（東京都）

「口語の時代は」、「さむい」とは、一九七〇年代に荒川洋治が記した著名な詩句の一節。その詩句は、センセーショナルな話題を伴って取り上げられてきたが、作者は「まだ」の副詞を差しはさむことで、現在に対する諧謔を手に入れている。自祝のための、お茶目な本歌取り。

楽なんだ。

右に死人を運ぶより、
俺が左へ歩いたほうが

大嶋 碧月（石川県）

かつて、石原吉郎がロシアの収容所での出来事を記した文章を思い出した。右か左か（石原の文章では真ん中もあるが）、どちらを歩くかという、一見たわいもない選択が、そのまま生死を分つことも世界には存在するのだ。

この世では速さが
霧の向こうでは
臆病なタイピングが
すべて

汐見りら（東京都）

「この世」と「霧の向こう」、そして「速さ」と「臆病なタイピング」。そんな対比と隔たりから連想させられるのは、やはりアウシュヴィッツなど絶滅収容所のイメージではないか。結句の「すべて」の一語が、胸を打つ。

ヒヨドリに揺らされて散る

花びらの

ように

野原に呼ばれてしまう

うたた（岡山県）

「ヒヨドリ」、「花びら」と等価に配された作中主体。ここでは、鳥も花も人も同じように「呼ばれてしまう」、フラットとも公平とも呼べる世界が形象化されているのではないか。

どの嵐の中も妙に明るくて

シンクの銀は夏の仮縫い

常田 瑛子（山口県）

結句の「夏の仮縫い」に至るまでの修辞が美しい。実体と呼べるものが希薄であるにも拘らず、「嵐の中」、あるいは「シンクの銀」という措辞が呼びよせる気配が感傷的にならず、言葉としてチャーミングだ。

この国で生きていくから

受け取った印鑑を

白紙に何回も押してみる

ひろみ（京都府）

「印鑑」とは、日本でしか通用しないフォーマルな信用の証。難民や移民の受け入れに、けっして積極的とは言えない日本において、「白紙に何回も押してみる」という行為は、安堵なのか、喜びなのか……。どこか、諦めにも似た悲しみさえ滲む。

くしゃみしたら百人

松本 幸大（埼玉県）

三月のくしゃみの前の
一瞬の裏声のような
人になりたい

ムクロジ（群馬県）

どちらも、「くしゃみ」をモチーフにした作品。かつて俳人の阿部青鞋は、「くさめして我はふたりに分かれけり」という怪作を記したが、松本さんの句では「百人」。その極端な誇張から、どこかポップなユーモアさえ漂う。また、ムクロジさんの「一瞬の裏声」には驚かされた。たしかに「くしゃみの前」には、「裏声」のような声ならぬ声を発している。そんな微細な一瞬を捉えたことが鋭い。

んめ、んまと父はいった梅と馬

鷺浦 るか（富山県）

たしかに日常の会話では、「んま」とか「んめ」と言う人がいる。その会話の流れの中では理解できるものの、そのまま書き言葉に表記すると解らなくなる。ありのままの話し言葉と書き言葉のズレ。そのズレそのものを取り出す手つきに、言葉への批評性が宿る。

履歴書の空白に鳩が出ますよ

綿貫 文（東京都）

「鳩が出ますよ」の措辞によって、「履歴書」というフォーマルな形式が茶化されている。「履歴書」もまた、何が飛び出すかわからない手品のひとつであるかのように…。